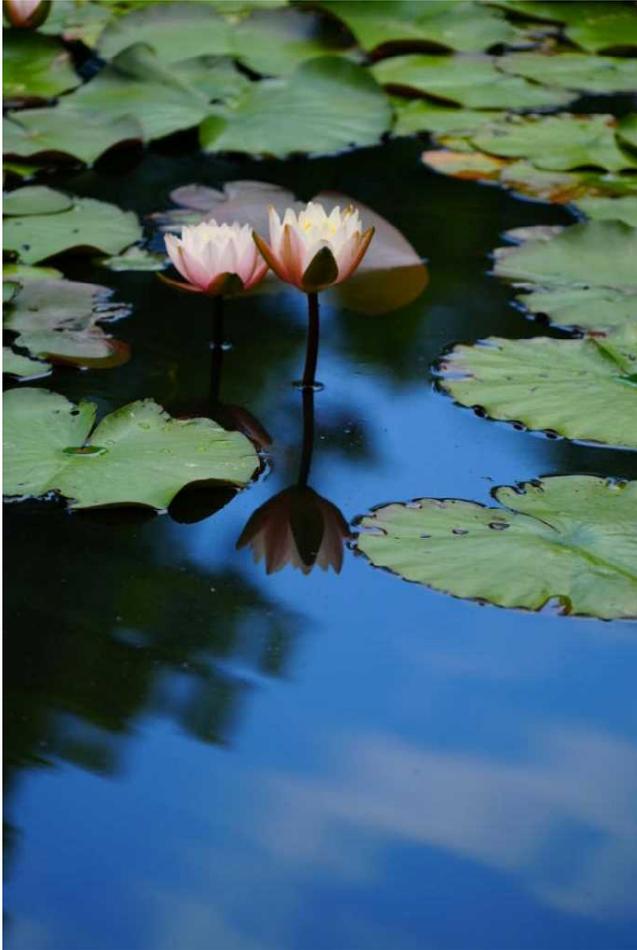




# 晴天の心

立教187年7月号  
大阪府富田林市寿町4-9-10  
URL:www.tomiishi.net  
TEL:0721-23-3466 090-5243-4669



月次祭 7月19日(金) 午前10時～  
婦人会例会 7月9日(火) 午前10時～

6月に行われたようぼく一斉活動日には多くの方が参加されていまして。あと3回予定されていますので、是非都合をつけてご参加ください。7月27日～8月4日の間こどもおぢばがえりが、今年から内容が一新されて開催されます。申し込みがオンライン化され、夜のパレードが無くなったり鼓笛オンパレードが午後からとなったりプール行事も無いなどいろいろな事が変わりますが、コロナ禍を経て対応をなされた結果だと思います。この期間中、どうぞ家族でおぢばにお帰りください。詳しくは専用サイトもしくは教会までお問い合わせください。

「こどもおぢばがえり」で検索

<https://kodomo-ojibagaeri.com/>

富石として、こどもおぢばがえりに初めて参加したのは、1997年石開分教会と合同での帰参が最初です。高校生時代にひのきしんをしたことはありますが、引率するのは初めて。何もかも石開の会長さんのお世話になりました。

6月15日にその石開の会長さんが出直されました。陽気でいつも冗談ばかり言うて人を笑かしていた人でした。子どもにも好かれて、こどもおぢばがえりの待ち時間に飽きさせないようにいつも何か楽しませようとしている姿が思い出されます。

こどもおぢばがえりは、子どもにとっても引率する大人にとってもいろいろな経験をすることが出来る素晴らしい時間です。どうぞ、この期間におぢばがえりを家族でなさってください。ひと夏の思い出が、人生を大きく豊かにするでしょう。

### <おやのころ>

このコラムの原稿は、いつも午前4時ごろから執筆しています。

冬場は、まだ真っ暗な夜空に星のきらめく時間帯ですが、いまの季節は、すぐに東の空が明るくなってきます。柔らかい光が窓から差し込む時間になると、さっきまで響きわたっていたカエルの鳴き声に代わって、静かな鳥たちの歌声が聞こえてきます。

夜は寝苦しいほどだったのに、早朝の空気はかなり冷たいようです。さあ、戸外で少し深呼吸をしてから、この原稿を書き上げることしましょう。

「さあ／＼どうも騒がしいと言うと、どんならん。そこで朝早うと言うのや」

夜明け前の冷気をたっぷり吸い込み、机の前に戻ってきました。これでもうすっかり、体はシャキッとしています。

今日の  
おやのことば

「そこで朝早うと言うのや」

さあ／＼どうも騒がしいと言うと、  
どんならん。そこで朝早うと言うのや。



おさしづ 明治21年7月4日

朝の落ち着いた空気の中で「おさしづ」を拝読しながら、静かに自分自身を見つめ直す。どんなに忙しい時期にも、早朝にこの時間を確保することで、この数年間、とても充実した毎日を過ごせています。家族間の心のすれ違いも、この時間を通して、かなり解消することができました。

とはいえ、コラムの執筆を続けてこられたのは、何よりもまず、体が健康で元気に暮らすことができたからです。

玄関先で「カタン」と音がしました。今日の新聞が配達されたようです。さあ、親神様のご守護に感謝して、一日を勇んで過ごしましょう。(岡)

執筆されているこの先生のように、朝早く起きられる方もおれば、夜勤の仕事帰りで朝早くには起きれない方も現代社会ではおられます。

生活のリズムは、昔とはずいぶん変わったように思います。

朝起きて仕事に行くまでの時間に、皆さんは何をなさるでしょう？

新聞を読みながらテレビやラジオのニュースに耳を傾け、朝食を急いで食べて身支度を調べ家を出て仕事に向かう。そんな毎日では無いでしょうか？

家事を任されているなら、仕事に出かけるまでに朝食の用意や洗濯掃除もして子どもを学校などに送り出すことも大事ですね。とかく毎日が慌ただしく過ぎていくと思います。

この慌ただしい時間を毎日続けていくと、どうなるでしょう？いつも得ている情報というのは、実のところ自分を外から見られている視線、他人がどうその人を見ているかというものばかりでは無いでしょうか？ネットで流れている情報にしても、どこまでが真実か、作られたものではないのか、あくまでも個人的観点であったりすることも多いように思います。自分自身の姿は、実は自分では直接みることは出来ないのです。



鏡に映してみることでようやく自分の姿、形をみることになるのですが、それもあくまでも外見にとどまります。不思議にいろいろな情報が手に入るので、全く出会ったことの無い有名な人の事でも私たちは知っていて、そのことを元にあること無いことを面白おかしく話してしまうのかもしれないかもしれません。あくまでもどこまでが真実かはわからないことを元に話してしまうのです。ですから、誰もができるだけ自分を見た目だけでもよく見せるようにすることには努力を惜しみません。しかし、いくら綺麗に着飾っても、こころというのは行動として表れますから、ふとしたことから人に知られてしまいます。

そう良いことも悪いことも。もし、わずかな時間出かける前に、昨日のことから今日のことを振り返り自分の心使いを見直す時間をもってこころを新たにすることが出来たら、一日生涯という生き方にたどり着き、毎日、こころをリセットすることが出来ます。

すると、内面を磨くことに繋がりますから、自然と毎日が楽しく勇んで何事にも取り組むことが出来るようになります。

一日のをさまりは末代ののをさまりともいふ 明治 32 年 9 月 15 日のおさしづ

一日の日に生涯の理を定め 明治 27 年 3 月 5 日のおさしづ

毎日毎日慌ただしくすごす中で、どうぞわずかな時間、自分の内面を磨く時間を持ちましょう。(会長拝)

「人をたすけて、わが身たすかる」

「おふできき」に、「しんぢつにたすけ一ぢよの心なら なにゆハいでもしかとうけとる」(第三号 38)、「わかるよふむねのうちよりしやんせよ 人たすけたらわがみたすかる」(第三号 47)と教え示されています。人にどうでもたすかっていたきたいと願い念じ、真実込めてにをいがけに努める中に、結果として、自らも結構なご守護を頂戴ちょうだいすることが出来るのです。『稿本天理教教祖伝逸話篇』42「人を救たすけたら」には、そうした先人の姿が記されています。また、中山正善・二代真柱様は、人だすけに励む姿自体がたすかっている姿だと、ご教示くださいました。

## 教祖殿逸話篇

### 65.用に使うとて

明治十二年六月頃のこと。教祖が、毎晩のお話の中で、「守りが要る、守りが要る。」と、仰せになるので、取次の仲田儀三郎、辻忠作、山本利八等が相談の上、秀司に願うたところ、「おりんさんが宜かろう。」という事になった。

そこで、早速、翌日の午前十時頃、秀司、仲田の後に、増井りんがついて、教祖のところへお伺いに行った。秀司から、事の由を申し上げると、教祖は、直ぐに、「直ぐ、直ぐ、直ぐ、直ぐ。用に使うとて引き寄せた。直ぐ、直ぐ、直ぐ。早く、早く。遅れた、遅れた。さあ／＼楽しめ、楽しめ。どんな事するのも、何するも、皆、神様の御用と思うてするのやで。する事、なす事、皆、一粒万倍に受け取るのやで。さあ／＼早く、早く、早く。直ぐ、直ぐ、直ぐ。」と、お言葉を下された。

かくて、りんは、その夜から、明治二十年、教祖が御身をかかされるまで、お側近く、お守役を勤めさせて頂いたのである。

### <一粒万倍>

テレビで、アメリカのある有名大学での人気講義が放送されていました。「リーダーシップとは何か」と題したその講義で、世界中から集まってきた学生たちに向かって、教授は「私たちは数値化の世界に住んでいる」と話します。



「君たちは、ありとあらゆる種類の数値化のツールを学ぶだろう。会社や国家、組織、学校や家庭でさえも予算なしで経営することはできない。しかし、数値化に慣れてしまうと、私たちは数字が真実を表していると思うようになりがちだ。数値化できない真実はたくさんある」。そして、教授はこう強調しました。

「善、すなわち善い行いは数値化してはならない」。

「人は自分が達成したいと願うことを、すべて達成することは出来ない。一国の大統領を務めた人で誠実な人は、誰でも絶望した状態で職を辞す。何故なら、成し遂げたかったことを成し遂げられなかったからだ。一人の子供の目に光を灯すことが出来たのならば、君は数では表せない善を行ったことになる。一つの命を救うことは世界を救うことだ」。

思えば、人は生まれた時から数字というものと切っても切れない関係にあります。年月を数え、時間に左右されながらの生活、学校に上がればテストの点数で評価は数値化され、仕事につけば成果によって報酬が決まります。人生とは、数字との格闘の連続だと言っても言い過ぎではないかもしれません。

天理教教祖・中山みき様「おやさま」は、ある時、一粒の粳種をお持ちになり、このようにお諭してくださいました。

「人間は、これやで。一粒の真実の種を蒔いたら、一年経てば二百粒から三百粒になる。二年目には、何万という数になる。これを、一粒万倍（いちりゅうまんばい）と言うのやで。三年目には、大和一国に蒔く程になるで」（教祖殿逸話篇 30「一粒万倍」）

数をめぐる様々な問題が世の中から消えることはないでしょう。私たちの日常においても、数に悩まされる現実が途切れることはありません。

そんな中、「数を生み出す元は、一粒の真実の種である」との教祖の教えは、私たちに勇気を与えてくださいます。

忘れてはならないのは、日々、地道に真実の種を蒔き続けること。その延長に、数え切れないほどの「善」にあふれた世界が現れてくるのではないのでしょうか。



<一粒万倍とは？>

親神様のご守護を農業の実感に例えてお教え下されています。

たとえば米は、一粒の粃種から、稲穂になり、それをまた蒔き、またまきと繰り返していくと、やがて万倍の米ができます。

原典・おさしづに

雨ふる中もだん／＼しのぎ、百石まいて一粒万ばいといふ

明治 29 年 10 月 10 日のおさしづ

不自由すれば不自由は一粒万倍にしてかやす

明治 31 年 4 月 20 日のおさしづ

心配は楽しみのたね、一粒万倍といふ事はもうとうから／＼さとしおいたるほどに

明治 38 年 12 月 4 日のおさしづ

とあります。

日々、親神様のお話を聞き分け、身上かしのかりものの理を自覚し、たんのうとひのきしんに徹して、常に人に喜んでいただく、たすかっていたとくという真実は、たとえそれが小さなものであっても、その一粒の真実の種を万倍にして下さるのです。

今世間で一粒万倍日と言われているものとは、事の本質が違うのです。

### 67.かわいそうに

拙冬鶴松は、幼少から身体が弱く、持病の胃病が昂じて、明治十二年、十六才の時に、危篤状態となり、医者も匙を投げてしまった。

この時、遠縁にあたる東尾の伝手で、浅野喜市が、にをいをかけてくれた。そのすすめで、入信を決意した鶴松は、両親に付き添われ、戸板に乗せてもらって、十二里の山坂を越えて、初めておぢば帰りをさせて頂き、一泊の上、中山重吉の取次ぎで、特に戸板のお許しを頂いて、翌朝、教祖にお目通りさせて頂いた。

すると、教祖は、「かわいそうに。」と、仰せになって、御自身召しておられた赤の肌襦袢を脱いで、鶴松の頭からお着せ下された。この時、教祖の御肌着の温みを身に感じると同時に、鶴松は夜の明けたような心地がして、さしもの難病も、それ以来薄紙をはぐように快方に向かい、一週間の滞在で、ふしぎなたすけを頂き、やがて全快させて頂いた。

鶴松は、その時のことを思い出しては、「今も尚、その温みが忘れられない。」と一生口癖のように言っていた、という。



### 71.あの雨の中を

明治十三年四月十四日（陰暦三月五日）、井筒梅治郎夫婦は娘のたねを伴って、初めておぢばへ帰らせて頂いた。

大阪を出発したのは、その前日の朝で、豪雨の中を出発したが、おひる頃カラリと晴れ、途中一泊して、到着したのは、その日の午後四時頃であった。

早速、教祖にお目通りさせて頂くと、教祖は、「あの雨の中を、よう来なさった。」と、仰せられ、たねの頭を撫でて下さった。更に、教祖は、「おまえさん方は、大阪

から来なさったか。珍しい神様のお引き寄せで、大阪へ大木の根を下ろして下されるのや。子供の身上は案じることはない。」と、仰せになって、たねの身体の少し癒え残っていたところに、お紙を貼って下さった。

たねが、間もなく全快の御守護を頂いたのは、言うまでもない。梅治郎の信仰は、この、教祖にお目にかかった感激とふしぎなたすけから、激しく燃え上がり、ただ一条に、にをいをかけおたすけへと進んで行った。